

【年頭にあたって】

本会の21年目への出発に思うこと

本会代表（精神科医） 原田 正文

会員のみなさんには、健やかに新年をお迎えされたこととお慶び申し上げます。さて本会は昨年12月に満20年を迎えました。これまで多くのみなさま方に支えられて20年を過ごすことができました。ありがとうございました。今月号では、本会の21年目にあたって、私の思いと決意らしきものを述べたいと思います。

KKIの20年

本誌の読者のみなさんも本会の活動の変化に伴い、特にBPプログラムの開始以来、大きく変わってこられていますので、本会の発足当初のことをご存知ない方も多くなってきたように思います。そこで今回はこの20年を振り返り、これからについても考えてみたいと思います。

本会は、1980年代後半から自然発的に広がっていた母親たちの自主的なグループ子育てに“希望の灯”を感じ、地域でグループ子育てにたずさわっている親たちと専門職とで立ち上げた会です。本会の活動は、大きく3つの時期に分けて考えることができます。

第1期は1995年から2002年までで、地域の親たちのグループ子育てへ支援が中心でした。本会が何をしたらしいのか、まだよくわからなかつた旗揚げ当初、地域で活動をされていた親たちの本会に対する期待が殊の外大きくて、その期待に支えられて活動していたような気もします。親たちの声と実践活動を『みんなで子育てQ&A 一はじめの一歩からネットワークづくりまで』（服部祥子・原田正文編著、農文協、1997年）は、その後の親たちの活動に大きな影響を与えました。この時期の本会の活動は、親たちの活動を意味づけ

たり、親たちの実情や活動の発表の場を提供したり、全国の子育てネットワークの調査をしたり、という取り組みが中心でした。

第2期は2002年から2010年まで、カナダの親支援プログラムのNobody' Perfect（NPと略称）を中心につけてきた時期です。NPとの出会いは、本会に大きく変革をもたらしました。

そして第3期はNPの実践からBPプログラムを開発・発表した2010年から現在までの時期です。これからが本会の真価が問われる時期ではないかと考えています。

「健やか親子21（第2次）」に期待する

国の次世代育成支援推進法に基づき、平成27年度より「子ども・子育て支援新制度」が発足しましたが、それとは別に実施されていた「健やか親子21」の取り組みが前者の取り組みときわめて関係が深いことから、平成27年度からはこれらを一體的に進めることになりました。そして「健やか親子21」は第2次計画として、期間を平成27年度から平成36年度までの10年間とし、以下の3つの基盤課題

1. 切れ目ない妊産婦・乳幼児への保健対策
2. 学童期・思春期から成人期に向けた保健対策

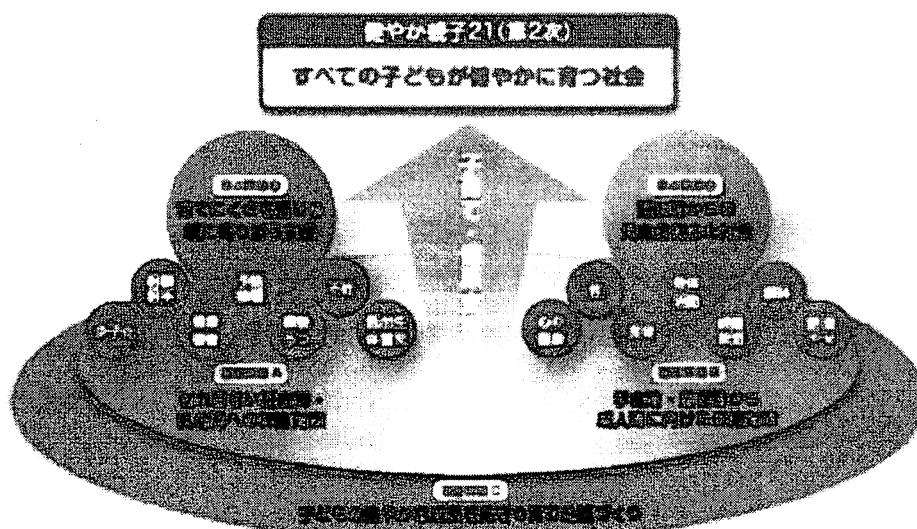


図1 「健やか親子21（第2次）」のイメージ図

時代の要請に応えられる組織へ！

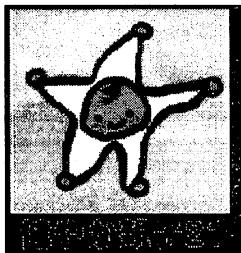
3. 子どもの健やかな成長を見守り育む地域作りと以下の2つの重点課題

1. 育てにくさを感じる親に寄り添う支援

2. 妊娠期からの児童虐待防止対策

を設定しました。それらの課題を図式化したものを図1に示します。これらの課題は時代の要請を的確にとらえていると考えられます。図2は「健やか親子21（第2次）」のシンボルマークです。

図2



エンゼル・プランが始まった1995年度当初には、子育て支援は厚生労働省の中でも福祉部門におろされたという経緯があり、戦前から長らく母子保健を担当してきた保健師を中心とした保健部門は、母子保健の延長線上で、子育て支援をしたくても「それは福祉の仕事だろう！」と上司に一蹴され、涙を呑んできたという経緯があります。ところが、2001年度より「健やか日本21」という、どちらかというと中・高年世代を対象とした生活習慣病対策を主テーマとした施策が始まっています。申し訳程度に「健やか親子21」という取り組みが始まりました。その結果、母子保健部門でも子育て支援に取り組める取っ掛かりはできました。しかし「健やか日本21」は医療モデルであり、子育て支援とは一線を画すものでした。ところが10年経った時点で見直しが行われ、図1に示すような、まさに子育て支援の課題が「健やか親子21（第2次）」では掲げられたのです。しかし、実際の取り組みはまだまだ医療モデルを超えるものではなく、これらの課題が解決できるものとは思えないのが現状です。私は元々保健部門の人間であり、この「健やか親子21（第2次）」には大いに期待し、本会としても主体的に参加していきたいと考えています。

第一次予防を大切にする

公衆衛生学をベースにした保健部門の特徴のひとつは、「現場の状況をいち早く把握し、法律ができる前に実践を先行する」という点です。世界に誇れる乳幼児健診も、法律より実践の方が早く進んだ典型例です。

もう一つの特徴は、第一次予防を主に実施する部門であるという点です。第一次予防、第二次予防、第三次予防については、現在本会が実施しているBPファシリテーター資格更新講習会でも取り上げています。「医学領域で使う第一次予防、第二次予防、第三次予防とはどういう意味か？」

についてグループでディスカッションをしてもらっていますが、なかなか正解が出ないことに驚いています。第一次予防とは「病気にならないようすること」であり、いわゆる予防です。第二次予防とは「病気の治療」であり、第三次予防とは「リハビリテーション」です。保健部門が担当するのは、第一次予防です。医療は第二次予防や第三次予防を担当し、福祉は第三次予防を担当するというのが従来からの役割であり、教育課程もそのようになっています。

BPプログラムを実践する中で、保健部門が主体となって実施している市区が、すべての初めて赤ちゃんを育てる母親にBPプログラムを提供したいという考えがすっと入りやすいのは、ベースにある考え方方が第一次予防を大切にしているためです。予防接種や結核予防などの事業でもその効果を上げるために全数把握が欠かせない。そういう点で、私は「健やか親子21（第2次）」に大いに期待したいと考えています。

年頭にあたっての決意

話は変わりますが、みなさんは数年前にベストセラーになった『もしドラ』という本をご存知ですか。『もし高校野球の女子マネージャーがドラッガーの「マネージメント」を読んだら』（岩崎夏海著、ダイヤモンド社、2009年）の略称ですが、NHKでドラマ化されましたので、ご存知の方も多いと思います。私は本会の運営のこともあり、また大学運営にかかわっていること也有って、組織運営のむつかしさを常々感じていたものですから、『マネージメント』というフレーズに惹かれて発刊当時にすぐに購入して読みました。その後もドラッガーの本を読もうと何度も努力するのですが、どうもよく分からず、途中で投げ出しています。その点、アイドルグループ「AKB48」のプロデュースにも携わったという岩崎夏海氏のドラッガー理解の深さには感心しています。

この度彼は、『もしドラ』の続編として『もしイノ』（『もし高校野球の女子マネージャーがドラッガーの「イノベーションと企業家精神」を読んだら』の略称）を上梓しました。昨年末から本屋さんに平積みされています。これも非常に面白い本でした。前置きが長くなりましたが、私は、『もしイノ』の中のフレーズ「ロシアでスターリンの死後に起きたように、また、あらゆる企業で常に起こっているように、優れたリーダーは、自らの退任や死をきっかけにして組織が崩壊することは、最も恥ずべきことであることを知っている」というフレーズに、ハッとさせられました。そして、今年年頭の私の言葉は、「私がいなくなつてもBPプログラムは元気よく日本で活躍できるためには、何をしたらいいのだろうか、を考えく」という決意になりました。真剣に考えていきたいと思います。（大阪人間科学大学副学長）